

スクミリンゴガイ情報第1号（水稻）

令和4年4月4日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

発生時期が早まる可能性があるため、注意しましょう。

1 前年作の発生状況

昨年7月下旬の巡回調査において、スクミリンゴガイの発生ほ場率は、33.5%（平成26.9%、前年34.8%）と、過去10年と比較して2番目に高い状況でした。また、ほとんどの株が食害に遭ったほ場も報告されました。

2 スクミリンゴガイについて

本種は、ほ場や水路で越冬し、水温15℃以上で活動を開始します。特に柔らかい植物を好み、田植え後約3週間までの稚苗を食害します。水中で摂食活動を行い、水面上の茎葉も引き込んで摂食するため、食害に遭った部分は欠株となります。多発生の場合、ほとんどの株が食害されることもあります。

3 今後の発生予測

冬期の気温が高いほど、スクミリンゴガイの越冬量は多くなります。令和3年10月から令和4年3月までの日平均気温は9.88℃（平成9.99℃、前年10.65℃）と平成並（過去10年間と比較して5番目に高い）でした。そのため、暖冬であり被害が大きかった令和2年度及び3年度と比較して越冬量は少ないと予測されます。しかし、3月31日名古屋地方気象台発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予想されるため、本種の活動開始が例年より早まる可能性があります。そのため、前年作で被害が大きかったほ場では特に注意が必要です。

4 防除対策

スクミリンゴガイの発生が確認されているほ場では、下表を参考に薬剤散布を行います。本種は田植え後すぐに摂食を開始するため、移植同時または移植直後に薬剤散布を行います。薬剤散布後、少なくとも3～4日間は湛水状態（水深3～5cm）を維持し、7日間は落水、かけ流しをしないようにしてください。

他の対策として、スクミリンゴガイは水中でないと摂食できないため、移植後3週間頃まで浅水管理（水深4cm以下）を行うことや取水口にネット等を設置し、水路から本田への本種の流入を防ぐことも重要です。

5 その他

スクミリンゴガイの防除対策については、農林水産省がマニュアル等（アドレス：<https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryoku2/sukumi/sukumi.html>）（令和3年3月改訂）を公開していますので、参考にしてください。

表 水稻のスクミリンゴガイに対する主な防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
スクミノン	メタアルデヒド	収穫60日前まで	散布又は無人航空機による散布	2回以内
ジャンボたにしくん	メタアルデヒド	収穫60日前まで	散布	2回以内
スクミンペイト3	磷酸第二鉄	発生時	散布、無人ヘリコプターによる散布	-

使用回数には、同一有効成分を含む剤の使用回数を含む。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。